



一貫コース通信

知の巨人を失う残念さを想い(その1)

10日前に夏至が過ぎ、今年も半分が終わってしまったが、巷の話題は、コロナ禍の直面する現実への対応と、実際に迫ったオリンピックの話題で持ちきりである。其れは其れとして、気持ちは梅雨明けの天の様には晴れていない。理由は…?だが、ここ半年間に逝去されたインテリゲンチヤーが少なくない事も在ると思う。知の巨人かどうか分からないが、私には昨年のクリスマス・イブに逝去された画家の“安野光雅”先生もその一人に当たる。先生との出会いは、代表作の一つ『旅の絵本』のI・II巻を娘の誕生祝いに頂戴した事で始まった。安野先生のライフワークとも言えるこの作品集は全9巻に及ぶ。作品には先生の独特の世界が広がりをも魅せ、馬で旅する旅人(氏か…?)の感性が随所に生きていて、旅先の文化と歴史を見事に表現している。特に印象深いのは、作中の人物描写に歴代の文学の山場が投影される事がシバシバある事で、安野先生が巨人で在る事を十分に感じさせる。蛇足だが、安野先生が影響を与えた人に、数学者であり、作家としても高名な藤原正彦先生(小川洋子著「博士の愛した数式」のモデル・先生著『国家の品格』はベストセラー)が居られる。藤原先生曰く、東京府立小学生の時、美術の代替教員として安野先生が着任された。そして、美術の指導を通じて数学の着想に必要な“美と感性の豊かさ”(嘘か本当か解りませんが…)を教わった…と、ある雑誌に書いておられた。

私の書棚には『絵本』以外にも安野先生の著書7冊(『青春の文語体』・『会いたかった画家』・『絵のある自伝』・『村の広場』・『故郷に帰る道』・『散語拾語』・『絵のまよい道』)が鎮座している。これ等には好きな画家の心理や、作品の解釈にも触れているが、かなりの頁が絵画では表現出来ない領域を言葉で記している。こうして見ると、安野先生は絵画を主とされながらも、言葉と絵の間を往来する事で、自分を忠実に表現しようと試みていた様に思えてならない。

ところで、安野作品の多くは時が在る所で止まっている様に見える。拘りの時点とは、ヒトと自然との共生が出来ていた時代だ。どちらかと言えば第一次産業に軸が在って、いずれも生きる糧を額に汗して得ていた時代だ。『旅…』のVIII巻は東日本大震災直後に出され、電力が豊富ではなかった【大正から昭和】のつつましい日本を題材にしている。あたかも、そんなに文明に頼らなくても、自分は生きられる…と言いたげなのだ。また、IV巻のアメリカは、【主役のインディアンから白人に移行直後】の間もない時代だし、VII巻の中国は【宋(文化が栄えた)】を中心に据えている。思うに、現在(各国の首都の様相は、画一・均質に思え…便利さでは甲乙つけがたい状況)には、トンと魅力を見いだせなかった様だ。これは司馬遼太郎先生のシリーズ、“街道をゆく”の挿絵にも感じられる。安野先生は司馬先生の街道シリーズにも同伴し、国内ばかりかアメリカ・台湾等の国外も旅し、数々の装画を描いた。安野先生の眼は常にその国の歴史・文化の神髄に迫る原風景を捉え、作品には生活するヒトの体臭さえ感じさせるモノも多い。思うに、安野先生の様な視点を持った作家が、この先、何時、現れるのだろうか。

